

# 天正遣欧使節の史料学

伊川 健二 (早稲田大学、日本)

## はじめに / Introduction

最初に、日本側のご参加者の方は、天正遣欧使節についてご存じの方も多いと思いますが、必ずしも詳細までは共通認識になってない場合もあると思いますので、基礎的なところからお話をしたいと思います。タイトルは、「天正遣欧使節の史料学 / Classification of Historical Sources about the First Japanese Mission to Rome」ということにしています。まずですね、天正遣欧使節の概略について、かなり基礎的なところも含めてお話をしたいと思います。適宜英語を交えてお話するところとしないところがあるかと思いますが。

最初はその天正遣欧使節、つまり横文字だと、特にスペイン語圏では、「La Embajada Tenshō」でしたでしょうか。そういう表現も出てきているようですけども、「the First Japanese Mission to Rome」みたいな言い方を、一般的にはするだろうというふうに思います。その天正遣欧使節についてです。

ルートは、世界地図的な規模でいうと、日本を出発して、マカオ、ゴア（パナジ）等を通して、とはいえず、インドにおける港としては、行きはコーチン（コチ）を使うのですが、ポルトガルはリスボンからヨーロッパに入って、スペインを通して、アリカンテを出港し、イタリアはリヴォルノから入ってローマに行きます。ローマではもちろん、2人の教皇、グレゴリオ13世およびシスト5世と謁見を果たすわけですが、旅が長くなるのは、むしろその後です。教皇に謁見したということで、各地から招待が来て、ボローニャ、ヴェネツィア、ミラノ、ジェノヴァなどを通して、スペインに戻って、そこからポルトガル。さらには、ほぼ同じルートを通して長崎に戻るというのが彼らの行程ということになります。

で、次は期間とメンバーについてですが、期間は1582年2月20日出発、1590年7月18日帰国のいずれも長崎発着です。メンバーは伊東マンショ、千々石ミゲル、原マルチノ、中浦ジュリアンの著名な4名に加え、企画したのは、イエズス会士のアレッサンドロ・ヴァリニャーノであることは、ご存じの方も多いのではないかと思います。

彼らの旅のイメージとしては、たとえば、昭和になってからの絵画ですけども、個人的になかなか好きでして、著書なんかに使わせていただいていますけども、寺崎武男が連作「キリシタン文化史的絵画—天正少年使節伝」（昭和31年完成）のなかで、「法王との謁見」という絵画を描き、グレゴリオ13世との謁見のようすを彷彿とさせたものがあります。

ということでこれだけお話をしても、史料学に結びつけることの意義が、必ずしも了解されにくいのではないかと思います。天正遣欧使節そのものに一種の挿話的な話題という印象が強く、「どれだけの情報量があるの？」と、研究されている方にとってはもちろん自明なのですが、それ以外の方に関しては、ちょっと学術的な研究対象としてのイメージが湧きにくいところがあるのではないのでしょうか。

ところが、後でお話しするとおり、関係史料の種類の高さ、それぞれの量の多さというのは、実は目を見張るものがありまして、まず、この点をできるだけ共通認識にして、本格的に資料を収集していくための基盤を整えたいというふうに思っています。(Variety and quantity of historical sources about their journey are huge. And many examples have been confirmed in various countries. This paper will share concrete picture of this point. Therefore I would like to establish a framework of international cooperation. This is the intention of my paper.)

ですので、まずは、いかにいろんな種類があるか。何というか、東京大学史料編纂所がまとめた、『大日本史料』という非常に厚い史料集があつて<sup>(1)</sup>、その2冊分がメジャーな情報としては共有されているわけですが、決してそれにとどまらない情報量があるということが、どんどん分かってきています。その枠にとらわれない、史料収集が実は必要で、既知の各史料がどういう性格を持っているかと傾向をつかむことによって、未紹介の、

さらなる情報にたどり着きやすくなるのではないかと、まだこの点は研究史上、必ずしも十分には共有されていないことだと思いますけれども、天正遣欧使節関係の史料をあえて分類してみる試みでございませぬ。

## 1、関係史料の多様性 (1) 芸術作品／

### Variety of Historical Sources (1) Fine & Performing Arts

#### 1-1 肖像画／Portraits

まず「肖像画／Portraits」ということで、つまり、いわゆる芸術というか、絵画が中心ですけれども、絵画にとどまらない情報なども残っていますので、初めに、そのあたりを概観してみたいと思います。

最近絵画に関しては新発見が続出していますが、それでも『ウルバーノ・モンテ年代記 / the chronicle of Urbano Monte』<sup>(2)</sup>の存在は大きいのではないだろうかと思います。ウルバーノ・モンテはミラノの地理学者で貴族ですが、その記事の位置付けは難しい。松田毅一さんは、「(天正遣欧)使節たちに実際に逢った」とお書きになっていますが<sup>(3)</sup>、どうも詳しく読んでいくと、そんなことはないだろうと思われませぬ。この年代記には「ナポリに行った」と書いているのですね。彼らが会ったとしたらその場所はミラノであるはずですが、ミラノ滞在時点ではナポリ行きはすでに中止になっています。直接会ったのであれば、そうした記事があるわけがありません。会ってはいないと思います。絵だけではなくて、彼らもしくは当時の日本に関する詳細な記録を留めています、記事の詳細についてはここでは省略します。(Urbano Monte is a geographer in Milan. And Prof. MATSUDA Kiichi mentioned possibility he had seen the mission directly. But I do not think so for some reason.)。

ただ、この本の価値については、その後絵画について幾多の発見がありながら、見過ごせないのは伊東マンショだけではなくて、それ以外の3名と、引率したイエズス会士ディエゴ・デ・メスキータの5人の絵画を含んでいることを指摘すべきだろうと思います。最近発見された絵画の中には、伊東マンショ、もしくは、メスキータを含めた事例がありますけれども、5人全員を含んだものというものは、肉筆のものとしてはこれだけであろうと思います。もう一つ有名なのは京都大学が持っている、新聞の印刷されたものがありますが、それとこちらが、どちらが先かは、にわかには分かりませぬ。明らかに類似している絵であるということと言えますが、肉筆画としては、これが唯一だろうと思います。

もう一つは、数年、10年ぐらい前でしょうか。やはり発見が世上をにぎわせた伊東マンショ像があります。これは、彼らと会ったローマ教皇、グレゴリオ13世の家系といわれている、ボンコンパーニ (Boncompagni) 家から見つかった像<sup>(4)</sup>で、現在は長崎歴史文化博物館に所蔵されている、長崎県が買い取ったということになるようです。これは、伊東マンショだけではなくてディエゴ・デ・メスキータと2人の肖像を含んでいます。このようなものが教皇の家系の家から発見されたということは、ご存じの方も多いと思いますけれども、一時期、世上をにぎわした情報としてございませぬ。

さらに、これまた最近です。3、4年ぐらい前でしょうか。トリヴルツィオ財団 (Fondazione Trivulzio) のコレクションの中から発見された伊東マンショ像がございませぬ。X線の調査の結果、このひだ襟が、当初の絵に比べて、現状ではずいぶん派手に描かれているということが明らかにされました<sup>(5)</sup>。後年描き改められた、

(1) 東京大学史料編纂所編『大日本史料／Dai Nippon Shiryo』第11編別巻之1-2／Part XI, Supplement I-II (東京大学、1959-1961年)

(2) 該当部分は、同年代記の1585年7月25日条である。稿本 (Manuscript) は Biblioteca Ambrosiana, Ms. P.251.sup, Urbano Terzo di Tal nome In detta Fameglia De'Monti, vol.4, ff.64-91v. 写真 (Reproduction) は、Camera di Commercio, Anno 1585, Milano vista dei giapponesi (Milano: Camera di Commercio, 1990)、全文テキストおよび邦訳 (text and Japanese translation) は伊川『『ウルバーノ・モンテ年代記』にみる天正遣欧使節と織豊期の日本 (一～二) / The first Japanese mission to Rome and images of sixteenth century Japan as presented in the chronicle of Urbano Monte(1-2)』(『東京大学日本史学研究室紀要 / Bulletin of the Department of Japanese History Faculty of Letters The University of Tokyo』13-14, 2009-2010年)を参照。

(3) 松田毅一『天正遣欧使節』(講談社学術文庫、1999年) p.292

(4) 長崎歴史文化博物館編集・発行『ローマを夢みた美少年 天正遣欧使節と天草四郎展』(2006年) p.24

もともとはそれほど大きくないひだ襟が描かれていたのが描きかえられたというようなこともいわれています。同時代もしくはそれに近い頃に描かれたと思われる絵としては、現段階ではそれぐらいでしょうか。ただ場合によっては、もう少し発見があるのではないかなというふうな風説もなきにしもあらずです。

あとはですね、先ほどの寺崎武男という、明治の頃にヴェネツィアに渡った日本の画家がいます<sup>(6)</sup>。先ほど言及した「法王との謁見」は、青山学院が現在所蔵してる一連の連作なのですけれども、その中の教皇謁見の絵は象徴的です。この同じ寺崎武男が、ヴェネツィア滞在中の明治 43 年（1910）に、その近くのヴィチェンツァにその関係の絵があるという情報を入手し、書き留めた絵が東京芸術大学に「イタリア・ヴェネツィア市オリムピア劇場壁画日本使節」として保存されています。

絵画としては最後の例になりますが、このシンポジウムのチラシにも使用させていただいた絵画があります。有名な近代日本画家である前田青邨による「羅馬使節」と題された作品で、本学内に會津八一記念博物館という博物館がございまして、そこの所蔵です<sup>(7)</sup>。年代は 1927 年ですので、古いものではありませんし、写実を意図したものでもありません。何だろう、街も多分、フィレンツェのパラッツォ・ヴェッキオみたいな建物も描かれています。特定のどこかのリアルな街を描こうとしたわけではなくて、イタリアのイメージを重ね合わせて、そこに騎馬に乗った、おそらくは伊東マンショなのではないでしょうか、イメージの中の彼らを 20 世紀になってから思い描いた絵画ということになります。チラシにはクリーム色を使いたいと思っていましたので、それに青はヒットするかなというところもありまして使用させていただきました。

## 1-2 地図 / Maps

芸術とは違うかもしれませんが、地図をここに分類しました。フィレンツェの国立公文書館 (Archivio di Stato di Firenze, Miscellanea Medicea 97-91) に保存されているものです。天正遣欧使節とメディチ家の接触によりもたらされたと考えられ、日本で描かれたものがフィレンツェに持ち込まれた可能性と、彼らの知識を前提にフィレンツェで描かれた可能性が想定されますが、どうもその紙が、分析の結果によると、イタリアで作られた紙ということですので、イタリアで何らかの、彼が持って来た地図を写したのではなかろうかという推定がされているようです。北が下、南が上に描かれています。いわゆる行基図と言われる地図の影の影響があると言われています。(About this map, a certain scholar discusses that it was copied in Italy, because the paper was made in Italy. But the style is based on old Japanese map. Therefore the mission brought this kind of map to Florence, and someone copied it.)

## 1-3 石碑 / Stone Inscription

これも芸術とは違うかもしれませんが、文献資料ともちょっと違うのでここに入れました。石碑ですね。ヴェネツィアのサンタ・マリア・デッラ・サルUTE (S. Maria della Salute) 教会に併設されるヴェネツィア総大司教神学校 (Seminario Patriarcale di Venezia) の碑文が著名です<sup>(8)</sup>。「日本に帰ったらカリター校 (現在のヴェネツィア総大司教神学校) のような学校をつくりたい」というようなことを述べていますが、そういう碑文なんかも、紙の媒体だけではなくて石碑にも残されている。あとはですね、このサン・ベネデット・ポーというところにある修道院にも記念碑があります。早い段階から知られていたんですけども、一時期、行方不明になっていたと思われるものが再発見された経緯がある碑です<sup>(9)</sup>。ですので、以上二つの碑があるとい

(5) 小佐野重利『《伊東マンショの肖像》の謎に迫る』(三元社、2017年) pp.115-116

(6) 寺崎武男については、館山市立博物館編集・発行『寺崎武男の世界』(2003年)に詳しい。ヴィチェンツァの壁画は同図録 p.15 参照。

(7) 會津八一記念博物館所蔵となる以前の 1929 年に、前田青邨本人から早稲田大学図書館 (現、會津八一記念博物館) への寄贈がなされた模様である。『早稲田学報』1240 (2020 年) p.35

(8) 前掲『大日本史料』2、邦訳編 p.132 において「サンタ・マリヤ・デ・ラ・カリター校碑文 / Memorial Inscription of the Japanese Embassy at Scuola di Santa Maria della Carità in Venice」と名付けられたものである。この碑文情報が近代日本へもたらされた経緯については、伊川「近代における天正遣欧使節の再発見」(甚野尚志・河野貴美子・陣野英則編『近代人文学はいかに形成されたか 一学知・翻訳・蔵書』勉誠出版、2019 年) 参照。

うことは、もしかしたら他の街にも碑があるかもしれないという目でもって調査することもできるのではないだろうかと思っています。

#### 1-4 音楽 / Music

もう一つは、やっぱり音楽ですね。ヴィラ・ヴィソーザというポルトガルの街で出されている雑誌の論文に、彼らがヴィラ・ヴィソーザを訪れたときに演奏された『グローリア・ラウス (Gloria Laus)』という曲の譜面が掲載されています<sup>(9)</sup>。もちろん当時の譜面ですから、この論文に書かれているようなスタイルで書かれていたわけではなくて、再構成されたものだろうと思いますけれども、音楽、彼らがローマに着いたときに『テ・デウム・ラダムス』という曲が奏でられたということも、『ウルバーノ・モンテ年代記』の中でもしばしば出てきますので、やはり音楽の歴史とも、密接に基づくトピックだろうと思います。こういうものの具体的な譜面が分かるような史料群については、ただ残念ながら、見つかって僕には読めませんし、もう研究などもあるかとは思いますが、そのあたりも情報収集を、今後ともやっていきたいと思っています。

## 2、関係史料の多様性 (2) 書籍および印刷物 / Variety of Historical Sources (2) Books & Printed Works

文献については、はじめに「書籍および印刷物」と題しましたように、比較的情報としてとつきやすいというか、親しみやすいところからいきたいと思っています。

### 2-1 旅行記 / Travel Records

天正遣欧使節の行程に関しては、ほぼ全容が知られています。松田毅一さんの『天正遣欧使節』、若桑みどりさんの『クワトロ・ラガッツィ』等々、僕も書いたことがあります。そういうものでごらんになった方もいらっしゃるんじゃないかと思っています。全行程が一応分かるわけですね。なぜ分かるかという、以下のようにいくつかの旅行記があるからです。このほか、ルイス・デ・グスマン (Luis de Guzman) 『東方伝道史 / Historia de las Misiones que han hecho los Religiosos dela Compañia de Jesus...』なんかも入れてもいいと思います。

ガイド・グアルティエリ / Guido Gualtieri 『日本遣欧使者記 / Relazioni della Venuta degli Ambasciatori Giaponesi a Roma fino alla partita di Lisbona』の邦訳は、近代の医者であり文学者として著名な木下杢太郎 (太田正雄) です。この頃の日本の南蛮ブームを牽引した人物の一人ということになるのですけれども、それにとどまらず、実は詳細に、『えすばにや・ぼるつがる記』という、今でももしかした通用するのではないかという、詳細な文献調査記録を残しています。イタリア語版の復刻は、在ローマ日本大使館で確か出ていると思いますけれども、10年以上前ですから、今も入手可能かどうかはちょっと分かりません。

あるいはルイス・フロイス / Luís Frois 『九州三侯遣欧使節行記 / Tratado dos Embaixadores Japões que forão de Japão á Roma no anno de 1582』という記録も残っています。これは一時期、フロイス『日本史』との関係がなかなかつかみにくくて、その一部だろうと考えられていた時期もあるわけですが、現在は一応分けて考えようという方向になっています<sup>(10)</sup>。ただ、このあたりの関係はなかなか難しいので、それで決着がついたかどうかということはないのではないかと思います。ちなみに、邦訳本で『続九州三侯遣欧使節行記』というものがありますが、これはそういう原題を訳したのではなくて、フロイス『日本史』からピックアップしてきた情報の総体ですので、この文献の続編というものとは性格が異なる文献だということは、余談ですが補足をしたと思います。原典は刊本になって同時期に出版されたということではなくて、現在はポルトガルの国立図書館に稿本が架蔵されている (Biblioteca Nacional de Portugal, COD.11098) ということになります。

旅行記の最後としては、ドゥアルテ・デ・サンデ / Duarte de Sande 『デ・サンデ天正遣欧使節記 / De Mis-

(9) この碑文については、伊川『世界史のなかの天正遣欧使節』(吉川弘文館、2017年) pp.133-134 参照。

(10) Michael Ryan, "Musicians and Music in the Chapel of the Dukes of Braganca at the time of the visits by the Japanese princes in 1584 and 1585" in *Callipole* 9 (2001), p.104

(11) 『日本史』との関係については、伊川「フロイス史料研究事始」(『多元文化』8、2019年) p.7などを参照。

sione Legatorum Iaponensium ad Romanam curiam, rebusq; in Europa, actoto itinere animaduersis Dialogus』という、またしばしば『遣欧使節対話録』ともよばれる記録があります。ドゥアルテ・デ・サンデは著者ではなく、アレッサンドロ・ヴァリニャーノが書いたスペイン語版をラテン語に訳した人物だといわれています。非常に大部なものですけれども、天正遣欧使節の旅行だけではなくて、ヨーロッパの知識体系に関する記述も多く含まれています。

これらの旅行記からですね、一行の、長崎を出発しローマに行き、また長崎に帰るまでの全行程が分かるということだけ、簡単にここでは触れておきたいと思います<sup>(12)</sup>。

## 2-2 パンフレット／Pamphlets

パンフレットは、宣伝・啓蒙などを目的に出版された小冊子です。具体的には、『天正遣欧使節記／Relatione del Viaggio, et Arrive in Europa, et Roma, de' Principi Giapponesi』のようなものです<sup>(13)</sup>。東京国立博物館などが所蔵していますが、こういう印刷された、彼らの旅とヨーロッパやローマへの到着に関する記録が、冊子として、特に彼らのローマ到着の前後に集中的に出される。これに関しては、もうすでに包括的な研究がありまして、ご存じの方もいると思いますが、アドリアーナ・ボスカロ (Adriana Boscaro) さんというヴェネツィアで教えてらっしゃった先生が、もうずいぶん前ですけれども、労作をお出しになっている<sup>(14)</sup>。

これによりますと、オーストリー、ベルギー等々ですね、多くの国に所蔵されているということが、目次を一瞥しただけでもあきらかになります。まだ、僕はこれに関しては本格的な調査をやったことがなくて、イタリアで若干、後追いの調査をただけですけれども、まだまだ出てくる可能性もあるのだらうと思っています。

## 2-3 年代記／Chronicles

あとはですね、総括的な、まとまった情報という意味では、年代記というものがあるかなと思います。年代記に関しては、先ほどの、『ウルバーノ・モンテ年代記』というものもありますが、ここでは、フィレンツェの街の年代記 (Chronicle of Florence by Settmani) を紹介します<sup>(15)</sup>。そういうものの中に、つまり彼らが、もちろんフィレンツェの記録ですので、フィレンツェに来たときのようなすなどがまとめられている。ですので、必ずしも追い切れてないですけれども、他の街の年代記のなかにも使節関係の記述が出てくる可能性はあるだらうと思っています。

## 3、関係史料の多様性 (3) 稿本／

### Variety of Historical Sources (3) Original Manuscripts

第2章は、まとまった分量がある記録を扱ってきたのですが、ここでは、本来歴史学で一番重要とされる第一次史料 (primary sources) といわれるものを、若干挙げています。

### 3-1 派遣主体または使節からの書簡／Letters from Sender or Embassy

一つには書簡です。使節自身の名前によって書かれたものもありますし、彼ら自身ではなくて、彼らを送った大名たちとか、随行した宣教師たちによる書簡、あるいはそれに対する返信の書簡。そういうものがたくさんあります<sup>(16)</sup>。

(12) 旅行記から彼らの旅程の全貌を知ることができるのであるが、スペイン、ポルトガルにおける彼らの動向を伝える一次史料の存在はほとんど知られていない点を後半で指摘する意図があったのだが、失念したまま報告を終えてしまった。ここに補足したい。

(13) 邦訳は岡本良知「天正遣欧使節記」(『大分県地方史』13~16 合併号 (1958 年))。

(14) Adriana Boscaro, *Sixteenth Century European Printed Works on the First Japanese Mission to Europe* (Leiden: E.J.Brill, 1973)

(15) 『大日本史料』1、邦訳編 pp.189-191、原文編 pp.162-164

(16) たとえば、伊東マンショらの書簡については、不完全ながら伊川『大航海時代の東アジア』(吉川弘文館、2007 年) p.270 がある。

書簡の例としては、邦文のみで書かれたものとしては、1582年正月27日付イエズス会総会長クラウディオ・アクアヴィヴァ宛大村純忠書簡 (Letter from ŌMURA Sumitada to Claudio Aquaviva, General of the Society of Jesus. ŌMURA Sumitada was a daimyō, or local authority in Kyushu region, and a sender of the mission.) があります<sup>(17)</sup>。邦文で書かれたものにイタリア語訳が付けられたものとしては、1585年8月2日付マントヴァ公世子ヴィンチェンツォ・ゴンザーガ宛伊東マンショ書簡 (From ITŌ Mancio to Vincenzo Gonzaga, the Prince of Mantova) があります<sup>(18)</sup>。ほかにもいくつかの類型があって、1585年6月18日付イモラ市宛伊東マンショほか4名書簡<sup>(19)</sup>は、邦文の本文の行間にイタリア語が混ぜられてるとか、邦文はなくヨーロッパ語だけで書かれたものとか、いくつかの類型があります。

### 3-2 各国使節の報告書簡／ Letters from Embassies in Europe

もう一つはですね、彼らの位置付けに関して注目すべきなのは、各国使節の報告書簡。どういうことかという、例えば特にローマですね。ローマには、ヴェネツィアだとかフィレンツェ、トスカーナ大公国、スペインなどの他の国の大使たちが駐在してるわけです。その大使たちが、天正遣欧使節がどういう扱いを受けているのか、どういう人たちなのかという情報を本国に送るわけです。一例としては、駐ローマ、ヴェネツィア大使、ローレンツォ・プリウリという人物から、ヴェネツィア総督、ニコロ・ダ・ポンテという人物に宛てられた書簡があります (A Letter from Lorenzo Priuli, Venetian ambassador in Rome to Nicolò da Ponte, governor of Venice, on 23 Mar. 1585<sup>(20)</sup>. He mentions the mission.). 使節のことは、あまりよく言っていないのですが、ただ扱いに関しては非常に面白い情報だろうと思います。このような事例も、ヴェネツィアのほかに、モデナのものがよく知られていますけども、その他にも、探していけば、スペイン大使なんかも書いていますが、もう少しいろいろな大使の情報に目を付ければ、情報量が増えていくのではないかと考えています。

### 3-3 会議録／ Conference Minutes

ヴェネツィアの会議録にも記事がございます<sup>(21)</sup>。

### 3-4 会計帳簿／ Accounting Book

会計帳簿ですね。彼らをもてなすときにいくらかかったのかというようなことが、たとえばフェラーラに残っているんですけども、そういうものがあります<sup>(22)</sup>。

## おわりに／ Conclusion

最初にお話ししたとおり、天正遣欧使節に関する基本史料は、東京大学史料編纂所が出している、『大日本史料』の2冊ということは、今でも動かないだろうと思います。非常によくできた史料集で、これを見て現地調査をしに行っても、現地のスタッフが、「こんな古文書はないよ」と平気で言う場合があるんですね。ところが、それは全く事実ではなくて、ただ真っ向から反論しても煙たがられるだけなのでしませんが、実は、探っていくとあります。スタッフが知らないだけで、絶対にあります。かなり正確な情報ですので、今でもそうい

(17) 京都大学総合博物館蔵。写真は新村出・濱田耕作解説『京都帝國大學文學部所蔵天正年間遣欧使節關係文書』(史学研究会、一九二九年)第1文書、後掲『大日本史料』など。テキストは『大日本史料』1、邦訳編 pp.319-320

(18) 稿本は Archivio di Stato di Mantova, Archivio Gonzaga, Busta 1704。テキストは邦文、伊語訳ともに『大日本史料』2、邦訳編 pp.206-207

(19) テキストは邦文、伊語訳ともに『大日本史料』2、邦訳編 pp.31-32

(20) 稿本は Archivio di Stato di Venezia, Senato, Dispacci, Dispacci degli ambasciatori e residenti, Roma, Filze, Pezzo 19, ff.38rv, 41r。テキストは『大日本史料』1、邦訳編 pp.297-300、原文編 pp.257-259。プリウリの情報については『世界史のなかの天正遣欧使節』pp.160-162で概観している。

(21) Archivio di Stato di Venezia, Senato, Deliberazioni, Terra, Filze, Pezzo 94。テキストは『大日本史料』2、邦訳編 pp.126-127、原文編 pp.101-102

(22) Paride Zajotti, *L'Ambasciata Giapponese del MDLXXXV* (Venezia: Gazzetta, 1884) pp.7-24。『大日本史料』2、邦訳編 pp.43-75、原文編 pp.36-57

う位置付けをしい史料集だと思ひます。

ただ、大きなことで1点だけ申し上げますと、ご存じの方はいらっしゃると思ひますが、イエズス会ローマ文書館 (Archivum Romanum Societatis Iesu) 文書が『大日本史料』には1点も入っていません。同文書館は、『大日本史料』発行時点では公開されていなかったからなのですけれども、後年、結城了悟神父が邦訳をお出しになっています<sup>23)</sup>。そういう事情もあって、現段階の研究水準においては、やはりこの2冊の枠組みを再編する総括的な情報収集が必要になってくるだろうと思ひます。自分自身も調査してゐる中で、未紹介の情報はいくらかでも出て来てゐます。ただ面白い情報が少なく、学会ではあまり発表してないのです。すでに知られていることを、例えば他の人物が書いていたとか、その程度情報は数限りなくあるのですが、それをこういう場でお話ししても、「ふーん」という感じで終わってしまひますので。その中で面白いものを抽出するのは難しいのですが、ただ情報の体系自体は、もう再編すべき段階に来てゐるだろうと。その再編するにはどうしたらいいかということに関しては、僕自身は、これまではやみくもに史料調査をしているところがあったのですが、これからはちょっと戦略的に収集する必要があるだろうと思ひます。その一つの方法として史料群を分類して、その分類から目星をつけて、現地の公文書館などで調査をするという方法があるのではないかとご提案です。概括的な話ですから、皆さんのように、きりっと、「あ、これが分かった」という報告ではなくて、ちょっともやもや感が、お疲れのところ残るようなお話かもしれませんが、そういう意味で学術的な意味がある話じゃないかと、こちらとしては思つて提案をさせていただいたということになります。(The purpose of this presentation is to share variety and quantity of historical sources about their journey. The sources are conserved in libraries or archives in various countries. It means international cooperation is necessary to continue documental research as the framework. I believe that as a methodology, classification of sources is helpful to seek for unfound documents. This presentation was an attempt for it as the first step.)

23) 結城了悟『新史料 天正少年使節』(南窓社、1990年)